

2019年2月24日 週報巻頭言

イエスにもてなされる幸いを知るか

「マルタは、いろいろのもてなしのためせわしく立ち働いていた。」(ルカ 10:38)

主イエス様は、エルサレムに近いベタニア村のマルタ(おそらく姉)とマリアの家に入られたとある(ここでは兄弟ラザロは出てこないが、三人で暮っていたのだろう)。まずマルタが主を迎えたのだ。このあとのマルタの言葉には、既にイエス様と親しい関係があったことを窺わせる。

「主よ、わたしの姉妹はわたしだけにもてなしをさせていますが、何ともお思いになりませんか。手伝ってくれるようにおっしゃってください。」マルタは気働きが出来る愛情のある女性。もっともな言葉として聞こえてくる。

しかし、この時の状況を考えてみたい。既にマリアは、イエス様の話に聞き入っている。マルタはちょっとカチンときたのかも知れません。或るいは嫉妬があったのかも。「私が迎えたのに独り占めしないでよ」と。そう、きっとマリアは、この時イエス様を独り占めしないではいられない心があったのかも知れません。どうしてもこの時、主に語って欲しい、その飢え渴いた心、或いは慰めを求める心があったのではないのでしょうか？それはマリアの姿勢に現われています。「主の足もとに座って」(39節)。あとでイエス様はマルタに、「マリアは良いほうを選んだ」(42節)と言われます。それは「ただ一つの必要なこと」だとも。——これは、イエス・キリストのもてなしを受ける、ということではないだろうか。主イエス様は、「仕えられるため」に来られたのではないとおっしゃいました。むしろ「仕えるため」だと。誰のために？ 他ならぬ私たちのために！ 既にあの十字架が見えています。

私たちは、ただ主から、御言葉のもてなしを頂く存在なのです。それがどんなに甘美で慰めに満ちた時であることか。「(彼女から)それを取り上げてはならない。」(42節)

(丸山 勉)